

富山県におけるサ行イ音便の実態

坂喜美佳

キーワード: 富山県方言、サ行イ音便、モーラ動詞、語幹末母音

要旨

本稿では、現在用いられているサ行イ音便の実態を明らかにすることを目的とし、富山県において調査を行った。結果、「語幹末母音eの語」と「いわゆる使役性他動詞」が音便化しにくいという傾向が確認された。また、富山県の全域で調査を行うことによって、県内のサ行イ音便使用の境界線や地域差が明らかになった。

1. はじめに

現代日本語では、五段活用動詞の連用形に助詞「テ」や助動詞「タ」がつくとき、殆どの行で音便形をとるが、サ行に限っては音便形をとらない。しかし、サ行動詞も文献国語史上では、音便化する時代があったこと、江戸時代に入って再び元の形に戻ったことが指摘されている。このサ行イ音便という現象は、現在西日本を中心とした方言に残存している。本稿は、現在使用されているサ行イ音便の実態を、文献国語史の事実と照らし合わせて明らかにすることを目的としている。

本稿は、文献国語史における事実については先行研究を参照し、現在使用されているサ行イ音便の実態については、富山県において実地調査を行い、それを元に考察する。地域を富山県に限定した理由は、『方言文法全国地図(以下GAJ)』を見る限り、サ行イ音便が残存する地域の東端であることから、県内にサ行イ音便使用の境界線が存在する等の地域差がみられるのではないかと考えたからである。そこでまず、サ行イ音便を使用するインフォーマントの位相を確認するため、富山県高岡市を地点として選り調査を行った。そして、その結果を踏まえ、富山県内での地域差と、各地点でのイ音便化する語の実態を明らかにするため、富山県全域調査を行った。

本稿では、以上のような手順を踏んで、サ行イ音便という現象が、現在ある特定地域の方言において、どのような現象として現れるのか、文献国語史における事実と対照させながらみていく。

2. 先行研究

サ行イ音便に関する先行研究は殆どが文献、あるいは現代方言の調査を元にして、音便化して現れない語について考察する、もしくはサ行イ音便衰退の時期や要因を探るといものである。

橋本(1962)、奥村(1968)、北原(1972)等の中央語文献の調査によると、サ行イ音便は十世紀頃発生し、十七世紀半ばには衰退していたことが明らかにされている。また、サ行イ音便が以下のような条件をもつ特定の語において起こりにくいことも明らかにされてきた。先行研究から中央語においてサ行イ音便が生じにくい条件を整理すると以下ようになる(福島1992の整理による)。

- ①語幹末が長音の語
- ②2モーラ動詞で、アクセント類別上第1類の語
- ③いわゆる使役性他動詞
- ④語幹末母音がeの語

また、現代方言の調査を元にサ行イ音便について考察を行った研究も数多くあるが、ここでは、本稿と同じ富山県におけるサ行イ音便を対象とした先行研究として、小西(2001)を取り上げる。小西(2001)は、富山県富山市におけるサ行イ音便について、生え抜きの1945年生まれの男性をインフォーマントとし面接調査を行い、補助的に小西氏自身の内省についても触れている。調査結果をまとめると以下のようになる。

2モーラ動詞…イ音便化しない語が多く、アクセント類別上第一類の語でイ音便化するものは「足す」のみである。この方言においても、2モーラ動詞第一類のサ行動詞でイ音便がおこりにくいと言える。しかし、この方言ではアクセント上の動詞の対立がないので、福井(1982)のようにアクセントの違いがイ音便化するかどうかを決定する共時的な規則となるわけではない。第一類の動詞以外でもイ音便形が不可な動詞「伏す」「蒸す」などがある。

3モーラ以上の動詞…語幹末がe以外の動詞でイ音便化が不可なものは「申す」「話す」のみである。「話す」については文献上や他方言でイ音便化しにく

いという報告は見られない。

複合動詞…単純動詞でイ音便化する動詞が複合動詞の後部要素となる場合はイ音便化する。「越す」はイ音便化しないが、それを後部要素とする複合動詞ではイ音便化が可能である。これは奥村(1968)の言う「多音節語が音便化しやすい」という傾向である。

他に語幹末がeの語は音便化しないこと、語幹末が長音の語・使役性他動詞はイ音便化が可能ながことが述べられている。そして富山市方言では、イ音便化しないことを決定する共時的な音韻上の条件としては「語幹末がe」という点があげられるのみであり、他の例外語は語彙的に指定されていると考えざるをえないと述べている。

この小西(2001)は大変詳細な記述であるが、一地点の記述であり広い範囲の調査ではない。富山市については小西(2001)で言及されているので、本稿では富山県全域の調査を行う。富山県全域でも同じことが言えるのかどうか、その確認も行いたい。また従来の研究では、サ行動詞を網羅的に取り上げた調査はみられない。そこで本稿では、富山県内全域の調査により、できるだけ多くのサ行動詞について、イ音便化する語・しない語の実態を明らかにしたいと考えた。

3. 富山県高岡市調査

3-1. 調査の概要

4. 富山県全域調査の前提として、対象とするインフォーマントの位相を確認するため、富山県内で西側の中心地である富山県高岡市に地域を限定し、調査を行った。この調査はサ行イ音便使用の位相差を見ることを目的とした調査である。

調査期間:2006年7月～8月

調査地点:富山県高岡市内全域(地点は図1を参照)

調査語:富山県高岡市方言で一般に使用される以下の標準語の動詞56語。

貸す・刺す・挿す・差す(指す)・足す・出す・蒸す・消す・押す・越す・干す・あやす・荒らす・凝らす・壊す・澄ます・照らす・鳴らす・均す・離す(放す)・話す・更かす・蒸かす・化かす・燃やす・隠す・なくす・外す・許す・返す・起こす・落とす・降ろす・こぼす・過ごす・倒す・寄越す・通す・差し出す・しでかす・耕す・費やす・出くわす・持て成す・寝過ごす・甘やかす・驚かす・思い出す・志

す・唆す・膨らます・煩わす・思い起こす・思い直す・思い巡らす

調査方法：臨地面接調査で「[出す]を「ダイタ」と言いますか。」とイ音便形の可否

を尋ねた。調査の際、調査者からイ音便形を提示し、判断してもらった。

インフォーマント：富山県高岡市の生え抜き(外住歴3年以内、両親共に富山県内出身者)で10歳代～70歳代の各年代男女3名ずつ、80歳代のみ男女2名ずつ計46名。インフォーマントの性別・出身町名・生年を以下に挙げる。

10歳代：(男)川原本1991 / 大野1989 / 能町1988 (女)川原1990 / 開発本1988 / 戸出1988

20歳代：(男)戸出1986 / 戸出1985 / 戸出1985 (女)開発本1985 / 頭川1984 / 頭川1983

30歳代：(男)木町1976 / 開発本1973 / 開発本1970 (女)大坪1976 / 大坪1973 / 中川1969

40歳代：(男)開発本1962 / 熊野1962 / 開発本1961 (女)頭川1959 / 開発本1958 / 蓮花寺1957

50歳代：(男)開発本1956 / 戸出1955 / 頭川1954 (女)定塚1954 / 五福1953 / 新成1947

60歳代：(男)開発本1946 / 常国1939 / 頭川1938 (女)本丸1942 / 中田1938 / 五福1937

70歳代：(男)頭川1932 / 二上新1932 / 頭川1927 (女)内免1936 / 四日市1933 / 頭川1931

80歳代：(男)頭川1926 / 戸出1921 (女)中田1926 / 横田1921

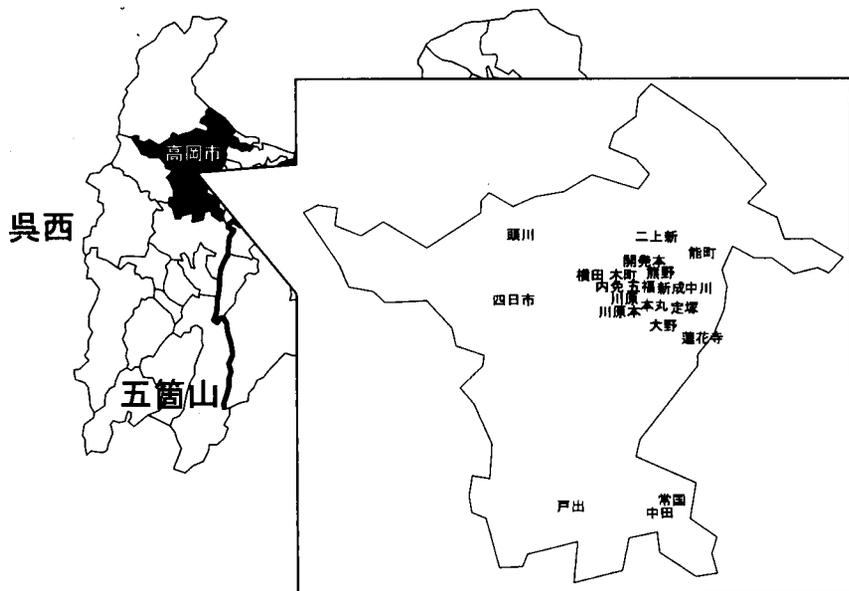


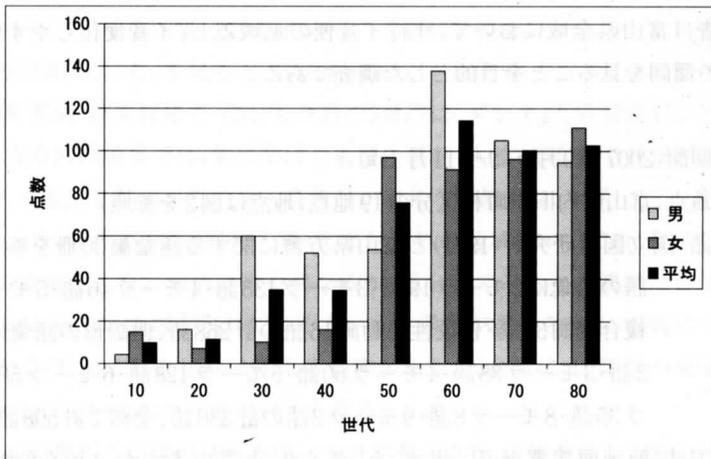
図1 富山県高岡市調査の調査地点

3-2. 調査結果

富山県高岡市調査の結果を表したのが、下のグラフ1である。グラフ1は、調査結果を世代・性別ごとに、音便化すると一人1点、音便化しないと0点(ただし80歳代は2名ずつなので音便化すると一人1.5点)とし、点数を数えたものである。点数が高いほど、音便形をよく使用するということになる。

まず、年齢差に注目してみると、10・20歳代、30・40歳代、50歳代、60歳以上と使用する世代を分けることができる。10・20歳代の若年層では殆ど音便形は現れず、かなり衰退しているのが分かる。最も多くの語で音便形を使用するのは60歳代であり、最も使用しないのは10・20歳代であった。50歳代は壮年層と老年層の中間に位置づけられるようである。したがってイ音便形を比較的良好に使用する世代は60歳代以上であると言える。この地域でのサ行イ音便の使用には年代差があることが分かった。

グラフ1 世代・男女ごとの音便化の点数



次に男女差に注目してみると、若干男性の方が多く音便形を使用するという傾向が見える。急に点数が上がるのは、男性が30歳代以上・女性が50歳代以上ということから、男性の方が比較的年齢が若くても使用することが分かる。しかし男女で大きな差があるという語は見られず、世代別にせず全体を平均した場合でも、明確に男女差と言えるほどの差は現れてこない。以上からすれば、富山県高岡市においては、サ行イ音便の使用に男女差はある程度見られるが、顕著な差とは言えず、積極的に性別

は関わらないと言ってもよいだろう。

この調査は、高岡市という富山県内のある特定の地域でのサ行イ音便使用の位相差を見ることを目的とした調査であった。したがって、一語ずつを見ていくことはせず、大きくサ行イ音便の使用に世代差があるか・男女差があるかについて見た。その結果、サ行イ音便の使用には顕著な男女差は認められないこと、年代差については、50歳代を境に若年層(10・20歳代)・壮年層(30・40歳代)と老年層(60歳代以上)で使用に大きな差がみられるというように、差が顕著であることが分かった。この結果に従い、次の富山県全域調査では、インフォーマントの世代を60歳代以上に限定し、性別については限定しないことにした。

4. 富山県全域調査

4-1. 調査の概要

高岡市調査で位相差を明らかにした上で、富山県全域を対象とする調査を行った。この調査は富山県全域において、サ行イ音便の地域差と、イ音便化しやすい語・しにくい語の傾向を見ることを目的とした調査である。

調査期間：2007年9月下旬～11月上旬

調査地点：富山県内旧市町村区分の19地点(地点は図2を参照)

調査語：国立国語研究所(1971)と富山県方言に関する語彙集30冊を参考に、標準語の語彙は2モーラ19語・3モーラ133語・4モーラ46語・5モーラ23語・複合動詞31語・使役性他動詞16語の計268語、俚諺形の語彙は2モーラ3語・3モーラ38語・4モーラ60語・5モーラ128語・6モーラ56語・7モーラ35語・8モーラ8語・9モーラ2語の計330語、全部で計598語

調査方法：臨地面接調査で「[出す]を「ダイタ」と言いますか。」とイ音便形の可否を尋ねた。調査の際、調査者からイ音便形を提示し、判断してもらった。

インフォーマント：その土地生え抜きの60歳代以上の方、各地点1名以上で計22名。60歳代以上のインフォーマントに限定した理由は、高岡市調査の結果からである。この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別を以下に挙げる。

氷見市脇方1932女/氷見市脇方1932女/福岡町福岡1932女/福岡町福岡1930女

高岡市開発本町1932男/福野町八塚1930女/大門町大門1935男/小杉町太閤町1935女

上平村小原 1925男/婦中町長沢 1932女/八尾町諏訪町 1929女/富山市安養寺 1937男
 大沢野町下大久保 1935男/大沢野町下大久保 1937女/細入村猪谷 1937男
 立山町芦峯寺 1937女/滑川市柳原 1928男/上市町東種 1937男/魚津市上口 1932男
 宇奈月町浦山 1926男/入善町上野 1932女/朝日町横水 1931女

4-2. 調査結果

ここでは調査結果のうち、分析に使用する部分を抜粋し次ページ表1に示す。

4-2-1. 地域差

富山県全域調査の結果について、地域差に注目してみると、まず、朝日・入善・宇奈月(図2の×の地点、表1の右端の3地点)ではサ行イ音便は全く回答されなかった。これらの地点は富山県の東端にあり、『GAJ』では朝日のみ非音便形を使用するとなっている。この朝日・入善・宇奈月はイ音便形が殆ど現れない新潟県と隣接している地域である。このことから、富山県におけるイ音便形使用の大まかな境界線(図2の太線)が分かる。この3地点に関しては、次からの考察に含めない。

『GAJ』の92図「出した」を見ると、富山県全域でイ音便形「ダイタ」が回答されているが、福岡町福岡・細入村猪谷・朝日町草野の3地点は「ダシタ」と非音便形が回答されている。一方今回の調査では、先に挙げた東端の朝日・入善・宇奈月で音便形が回答されず、また、典型的な動詞以外ではイ音便形が現れない地点に、上平・上市(図2の△の地点)があった。新潟寄りの朝日・入善・宇奈月以外の地域については、『GAJ』と今回の調査での音便化しない地域はやや異なるが、総合してみると山間部に音便化しない、ないしはしにくい地域が現れているという共通性が認められる。福岡については平野部であるので、これとは別に考える必要があるが、全般に、山間部の地域では音便化を起こしにくいということが言えるだろう。

さらに、イ音便形の伝播の進行方向について考えると、近畿中央から富山に伝播する進行方向として、新潟寄りの地域までイ音便化が及んでいないことと、山間部にも十分及んでいないことは統一的に説明できる現象であると言えるだろう。

また、表1の○の回答の実態に触れておくと、平野部の地点(富山・大沢野等)では質問に対してすぐさまイ音便形が回答されない、誘導を多用することが多い等があったが、海岸部の地点(氷見・高岡・滑川・魚津等)ではイ音便形が即座に回答された。このことから、山間部より平野部、平野部より海岸部でよりイ音便形の使用が優勢であると言える。

表1 富山県全域調査の結果(抜粋)

標準語	水見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
2 モーラ動詞																			
貸す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
a 差す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
出す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e 消す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
o 押す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
3 モーラ動詞																			
織す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
a 離す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
話す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
u 写す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
返す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
e 示す	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
試す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
o 倒す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
戻す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
oo 通す	トイ	トイ	トイ	トイ	トイ	トイ	トイ	トイ	トイ										
4 モーラ動詞																			
a 動かす	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5 モーラ動詞																			
a 紛らわす	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
使役性他動詞																			
a 嗅がす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
a 泣かす	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
埋形動詞																			
a スラカス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
a アゼカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
e サカランボカエス	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

※…動詞の語幹末母音 ○…音便化する ×…音便化しない /…その動詞を使用しない

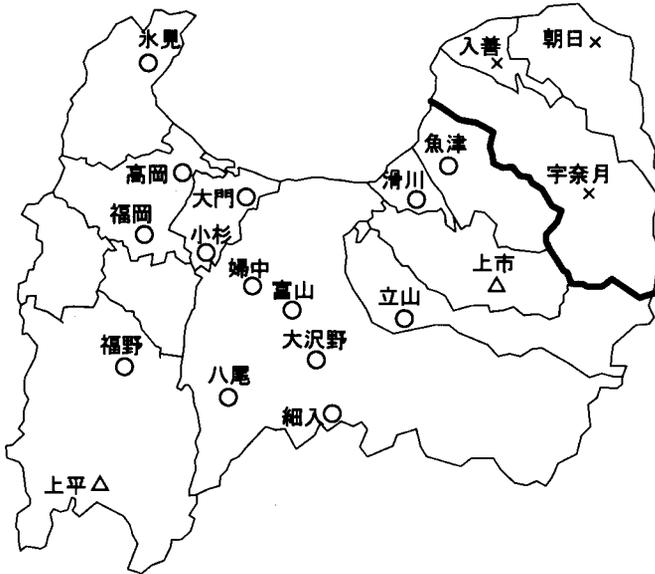


図2 イ音便使用の境界線

4-2-2. イ音便化しやすい語・しにくい語

以下、イ音便化しやすい語・しにくい語についての富山県の結果をまとめ、それぞれについて中央語と比較しながら話を進める。

まず、2モーラ動詞を見てみると、富山県方言で音便形がよく現れるのは「差す」「出す」、現れないのは「貸す」「消す」「押す」である。これらについては、共時的に見るとその違いを決定付ける要因は見えてこないが、ここで中央語文献上の事実と対照してみると、先に先行研究で挙げたように、アクセントの類が関係しているようである。具体的に言えば、調査で音便形が現れなかった「貸す」「消す」「押す」は、イ音便化がおこりにくい条件の「②2モーラ動詞で、アクセント類別上第1類の語」に該当する。しかし、小西(2001)も述べているように、富山県方言では動詞のアクセントは全て1型で、アクセント上の動詞の対立がないので、アクセントの違いがイ音便化の有無を決定する共時的な音韻上の条件とはならない。アクセントの類によってイ音便化が左右されるという、通時的な条件下において振り分けられた単語のグループが、富山県において、そのアクセントの区別を失った後も、語彙的に現代に引き継がれている現象であると解釈される。また、「消す」は「④語幹末母音がeの語」に当てはまり、中央語と同様音便化しないことがわかる。

さらに3モーラ動詞を見てみると、「返す」「示す」「試す」のような語幹末母音がeの語は音便化していない。一方、その他の語幹末母音「壊す」「写す」「倒す」「戻す」、語幹末母音が長音の「通す」はイ音便化している。また、「離す」はイ音便化するが「話す」は音便化しない。

これを中央語の条件に照らし合わせてみると、語幹末母音eの語が音便化しないのは、先の「④語幹末母音がeの語」の条件に当てはまり、この条件は富山県方言においても認められることになる。今回の調査では語幹末母音が長音の「通す」はよくイ音便形で現れた。表には挙げていないが、4モーラ動詞の「催す」も回答が得られた限りでは音便化しているようである。よって富山県方言においては、中央語の条件「①語幹末が長音の語」は当てはまらないようである。また、「話す」は中央語文献上ではよく音便化している語であり、富山県方言で音便化しないのは、「話す」という動詞はかなり共通語的なものであり、普段は使用しないからではないかという、語彙的な原因が考えられる。

使役性他動詞を見てみると、一番音便形が回答されなかった「嗅がす」は、16地点中1地点だけで音便形が回答され、一番音便形が回答された「泣かす」は16地点中12地点で音便形が回答されている。このように富山県方言では使役性他動詞は、語により地点により、音便化する動詞の傾向が異なる。しかし使役性他動詞とその他の一般の動詞を比べてみると、例えば3モーラ以上の一般の動詞は、先に述べた「④語幹末母音がeの語」と「話す」以外は、ほぼ全てイ音便化しているのに対して、使役性他動詞に限って語により地点によりばらつきが見られる。これは使役性他動詞が相対的にイ音便化しにくいということである。よって富山県方言においては、中央語の条件「②いわゆる使役性他動詞」は、中央語のように厳しい条件ではないが、ある程度当てはまるようである。

4モーラ以上の動詞を見てみると、「動かす」「紛らわす」のように全地点で音便化している語が多く、全く音便化しないという語は見られなかった。中央語では多音節語が音便化しやすいと言われている。よって富山県方言でも中央語と同様に多音節語は音便化しやすいと言えるだろう。

富山県方言の中から、富山で使用されている、いわゆる俚諺形について見てみると、基本的に音便化している。しかし、俚諺形の動詞であっても「アゼカエス(ひっくり返す)」「サカテンボカエス(逆立ちする)」のように、語幹末母音がeの語だけは、普段使う語であっても音便化しない傾向にあると言えよう。よって中央語の条件「④語

幹末母音がeの語」は俚諺形にも適応される条件であると言える。

5. おわりに

本稿は、富山県内全域の調査により、富山県で現在使用されているサ行イ音便の実態を明らかにすることを目的とした。

最初におこなった高岡市調査は、富山県全域調査でのインフォーマントの年代・性別を固定するために行った。その結果、男女差は顕著ではないが、年代差については、50歳代を境に若年層(10・20歳代)・壮年層(30・40歳代)と老年層(60歳代以上)に開きがあることが分かり、この結果を承けて富山県全域調査では、サ行イ音便を用いる年代としてインフォーマントを60歳代以上に固定することにした。

富山県全域調査では、山間部では典型的な動詞以外ではイ音便形が現れないという調査の結果となった。また、海岸部は平野部と比較してイ音便形の回答の反応がよかったという調査時の状況から、富山県においては海岸部がイ音便化の傾向が強く次いで平野部、そして山間部はイ音便化する傾向が弱いという地域差が認められた。

実際の語のイ音便化に関しては、中央語の条件に照らし合わせると以下のようにまとめられる。

- ①語幹末が長音の語…音便化する。
- ②モーラ動詞で、アクセント類別上第一類の語…音便化しにくい。
- ③いわゆる使役性他動詞…ある程度音便化しにくい。
- ④語幹末母音がeの語…音便化しにくい。

これはすなわち、富山県方言と中央語ではイ音便の成立可否に関わる条件が完全には一致しないが、かなり中央語の条件に沿ったものであると言える。

この結果と小西(2001)が富山市で調査を行った結果とを比較してみると、ほぼ同様の結果となったが、本稿では「③いわゆる使役性他動詞」については、一般の動詞と比べ、相対的にある程度音便化しにくいものとした点が異なっている。また、富山市のみに限らず、調査地域を富山県全域に拡大し、富山県全域ではほぼ同様の音便化傾向にあることを述べた点や、富山県内のイ音便を持つ境界線を明らかにした点、山間部が音便化しにくく、次いで平野部、海岸部がより音便化しやすいという地域差を明らかにした点が新しいと言えるだろう。

注

¹語幹末母音eの語「返す(複合語を含む)」については更なる調査を行っており、一部「カエイタ」というイ音便形も見られた。それについては坂喜(2009)をご覧ください。

参考文献

- 秋山英治(1999)「サ行四段活用動詞のイ音便はなぜ衰退、消滅したのか」『愛媛国文と教育』32, pp. 10-21.
- 大西拓一郎編(2002)『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 奥村三雄(1968)「サ行イ音便の消長」『国語国文』37-1(柴田武・加藤正信・徳川宗賢編 1978『日本の言語学 第六巻 方言』大修館書店所収), pp. 34-48.
- 鎌田良二(1968)「サ行五段活用動詞のイ音便—西日本方言について」『甲南女子大学研究紀要』4, pp. 36-57.
- 国立国語研究所(1971)『動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版.
- 国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』第2集 国立印刷局.
- 小西いずみ(2001)「サ行動詞イ音便化の例外語について—富山市方言の場合—」『地域言語』13, pp. 1-8.
- 小西いずみ(2002)「サ行動詞イ音便化の例外語について—山梨県奈良田方言の場合—」『山梨ことばの会会報』12, pp. 1-9.
- 坂喜美佳(2009)「『カエス』のサ行イ音便と『カヤス』の成立」『日本方言研究会第89回研究発表会発表原稿集』, pp.9-16.
- 坂梨隆三(1990)「近世におけるサ行四段活用のイ音便」『東京大学教養学部人文科学科紀要』91, pp. 133-165
- 築島 裕(1969)『平安時代語新論』東京大学出版会.
- 坪井美樹(2007)『日本語活用体系の変遷増訂版』笠間書院.
- 橋本四郎(1962)「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』31-4(橋本四郎1962『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店 所収), pp. 273-296.
- 福井 玲(1982)「飛騨萩原方言のサ行イ音便について」『国語学演習'82』(東京大学文学部言語研究室), pp. 118-126.
- 福島直恭(1992)「サ行活用動詞の音便」『国語国文論集』21, pp. 78(1)-65(14).
- 柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院.